

4. 日本中に広がった“出雲神”

<伯耆も、出雲の国だった>

- ・ 出雲神話と言え、遠い国の話のように感じる。実は、出雲神話の舞台は伯耆を含む大きなエリアであった。
- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 伯耆の国は、もともと出雲の国であった。白鳳時代に出雲から別れたものである。
 - ✓ 古事記でも、日本書紀でも、大国主命にまつわる伝説のある遺跡は、現在の出雲にはあまりなく伯耆や因幡に多い。出雲に伝わる伝説は、スサノウノミコトに関わるものが中心である。
 - ✓ このことを頭に入れてもう一度、伯耆の歴史を見直してみる必要があると語る。

<出雲神話は、作り話？>

- ・ 今、書店には出雲神話にまつわる書籍が数多く並んでいる。全国的に見ても出雲神話を見直そうとする気運が高まっている。
- ☑ 伝承者 関祐二氏：「「出雲神話」の真相」
 - ✓ 「出雲などどこにもなかった」という古代史学界の「常識」があった。
 - ✓ 第一に、約二十年ほど前まで、出雲の地で、神話に見合うほどの考古学上の発見がなかった。このため、記紀神話（「古事記」や「日本書紀」の神話）の三分の一を占める出雲の活躍は、絵空事に過ぎないと考えられていた。
 - ✓ 第二に、神話の中で出雲が大きな地位を占めていたからこそ、「出雲はなかった」との考えにつながったのではあるまいか。

<荒神谷遺跡の銅剣>

- ・ 昭和 59 年（1984 年）島根県斐川町で荒神谷遺跡が発見され、整然と列べられた銅剣が 358 本発掘された。それまで青銅器文化は北九州と畿内の二大勢力を中心と考えられていた。あるはずのない場所から大量の青銅器が出土したことで、古代史の常識を覆す大発見と言われた。それまで全国で発掘されていた銅剣の総本数が三百本程度であったと言われており、荒神谷での発掘の衝撃が伺われる。
- ☑ 伝承者 関祐二氏：「「出雲神話」の真相」
 - ✓ この地に「神宝」が埋められていることは、「出雲国風土記」が記録していることだった。大原郡神原（かむはら）の郷の段には、
 - ✓ 「天の下造らしし大神の御財を積み置き給ひし処なり」とあり、大己貴命（オオナムチノミコト）の神宝を祀った場所だったというのである。

☑ 伝承者 武光誠氏：「古代出雲王国の謎」

- ✓ 荒神谷遺跡から出土した銅剣の数 358 本が「出雲風土記」に見る神社の総数 399 社と極めて近いことに着目している。
- ✓ 整然と列べられていた銅剣であるが 4 列に分かれており各々数が違っていた。当時、出雲は四つの勢力圏に分かれており、その勢力圏内にあった神社の数とほぼ付合するという。この地は、何らかの宗教的儀式を行う場であったとしている。

< 加茂岩倉遺跡の銅鐸 >

- ・ 荒神谷遺跡発見から 12 年後、平成 8 年(1996 年)荒神谷遺跡から東南に 3 km ほどの大原郡加茂町で発見されたのが加茂岩倉遺跡である。
- ・ 農道工事の現場から出土した銅鐸の数は 39 個であった。それまで一箇所の遺跡から最も多く出土した銅鐸は 24 個であり、また銅鐸文化の中心と言われている奈良県から出土した銅鐸の総数が 20 個であったので、驚異的な発見であった。

< 鳥取県にある二つの遺跡の意味 >

- ・ 考古学の上で大きな発見として有名な遺跡は、佐賀県の吉野ヶ里遺跡や青森県の山内丸山遺跡などが知られている。
- ・ しかし、鳥取県にはそれらの遺跡に匹敵するか、またそれ以上の意味を持つと言われている遺跡が二つ存在する。一つは、気高郡青谷町青谷にある青谷上寺地遺跡であり、もう一つが西伯郡大山町と淀江町にまたがる妻木晩田遺跡である。

☑ 伝承者 関祐二氏：「出雲神話」の真相

- ✓ 鳥取県の二つの遺跡の大切なところは、何といても、二つの遺跡共に日本海に面し、天然の良港を持ち、朝鮮半島から出雲、そして越(新潟地方)へという流通の要にあったこと、邪馬台国やヤマト建国の直前、弥生時代の後期に繁栄を誇ったことである。
- ✓ すなわち、これらの遺跡は、弥生時代後期の山陰交流が、「出雲」という「点」から、日本海づたいに「線」でつながったことを伝えている。

< 青谷上寺地遺跡 >

- ・ 平成 10 年(1998 年)国道と県道の建設工事をきっかけで発見されたのが青谷上寺地遺跡である。木製品 9,000 点、骨角製品 1,400 点、人骨 5,200 点、鉄製品 250 点というおびただしい数の出土品が発見された。今だ全貌の発掘にはいたっておらず、発掘が進むと想像を絶する遺物が出土することが予想される。
- ・ 平成 12 年には、弥生時代の後期に殺害されたと思われる三体の遺骸(男性 2、女性 1)が見つかっている。その遺骸は粘土質の湿地で見つかったため脳の組織がそのまま残されており、弥生人の脳細胞の鑑定ができるのではないかと期待されている。
- ・ この遺跡で見つかった遺骸や遺骨には、戦乱によって殺害された痕跡が残されている。この三体の遺骸も、水路に無造作に放置されていた。回復した跡のない傷の付いた人骨も多数発掘されており、戦闘で傷つきそのまま亡くなった可能性を伺わせる。青谷上寺地遺跡は、弥生時代中期後半から弥生時代後期に繁栄していることが分かっている。

☑ 伝承者 関祐二氏：「出雲神話」の真相

- ✓ この時期は、中国の文書に記された「倭国乱」の時期と重なっている。
- ✓ 「魏志」倭人伝には次のようにある。
- ✓ その国、本また男子を以て王となし、住まえるところ七、八十年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という。
- ✓ 青谷上寺地遺跡の状況と「倭国乱」の記述が重なる。この頃、中国大陸で起こった動乱の激震が朝鮮半島を揺らし、その余波が日本列島にも伝わってきたのだという。

< 妻木晩田遺跡 >

- ・ 平成 4 年(1996 年)伯耆地方にとって、日本の古代史にとって歴史的な発見があった。これが妻木晩田遺跡である。
- ・ この遺跡は、鳥取県大山町から淀江町にまたがる 156 ヶタールの丘陵地に広がっている。今まで最も大きい弥生時代の環壕集落といわれてきた佐賀県吉野ヶ里遺跡の 1.3 倍もの広さを誇る日本最大級の弥生時代の遺跡である。
- ・ この遺跡の発見の衝撃を明治大学の名誉教授である大塚氏は、妻木晩田遺跡東京フォーラムの基調講演の中で次のように語っている。

☑ 伝承者 大塚初重氏：「妻木晩田遺跡をどう活かすか」

- ✓ 妻木晩田遺跡は、紀元前一世紀から紀元後三世紀にわたり連綿と遺跡が形成されてきた。
- ✓ 二世紀の後半から三世紀にかけての日本列島は、邪馬台国が台頭してきた時代であり、そのような歴史的激動期に日本海沿岸に妻木晩田遺跡があったことになる。
- ✓ かつて表日本、裏日本などという言葉を使っていたが、どうもこの時代の日本を見ると、日本海沿岸が表で、太平洋沿岸は裏であったと言うことも逆説的に言える。
- ✓ 1990 年代の日本の弥生時代研究に、妻木晩田遺跡は大きな衝撃を与えた。
- ✓ 新しい日本の弥生時代研究を想像する、いちばんの糸口になる重要な遺跡であると認識している。

- ・ 孝霊山の前面に突きだした丘陵地にある妻木晩田遺跡は、眼下に淀江平野が広がり、その先には弓ヶ浜、島根半島が見渡せる。まさに国引き伝説のパノラマを見るようである。
- ・ その昔、大山を目印として航海してきた多くの舟がこの丘の麓の入り江を行き来する光景が目につくようである。九州、北陸など日本各地から、また大陸などから来た舟もあったのであろう。



妻木晩田遺跡より弓ヶ浜を眺める

- ・ 私事であるが、私の父親の実家が妻木晩田遺跡の丘のすぐ下にある。父の子供時代には、裏山にある遺跡の辺りでよく遊んでいたという。そのような関係で私のルーツでもある妻木晩田遺跡には特別な思いを持っている。
- ・ 鳥取県にあるこの二つの遺跡に共通することは、日本海に面した入り江の近くに立地しているということである。島根半島に守られた穏やかな海に面した入り江の周辺に遺跡が集中している。航海技術が発達していなかった当時、陸づたいに航行した舟たちが中継地点として利用したのではないだろうか。つまり、交易の拠点としての役割を果たして、発展してきたと考えられる。この辺には、弥生時代の後期、山陰の地に大きな文化が花開いた秘密が隠されているのではないだろうか。

<越国まであった出雲の勢力>

- ・ 妻木晩田遺跡で特徴的なことは、四隅突出型墳丘墓の存在である。すでに四隅突出型墳丘墓と海の関係は述べたが、この墳丘墓の分布状況が注目される。
- ☑ 伝承者 武光誠氏：「古代出雲王国の謎」
 - ✓ 四隅突出型墳丘墓は、二世紀はじめ「安芸国」(広島県北部)の奥地で発生したものが、吉備を經由して出雲に伝わったとしている。そして、日本海側に沿って広がっていき「越国」(現在の富山県付近)まで伝わっていったという。
- ・ 四隅突出型墳丘墓がどこでできたかは別の問題として出雲の交易の範囲が越国まで及んでいたことが伺える。そして当時の首長たちの墓としてつくられた墳丘墓であり、その力関係は自ずと分かってくる。
- ・ 「国引きの伝説」にもこの状況を物語るくだりがある。
 - ✓ 四度目に引っ張ってきた土地が三穂の埼(美保関町)であり、その土地は「高志(越)」の都都の三崎で余っていた土地だという。
- ・ 伝説の中とは言え、越の国との強いつながりを物語っている。

<大国主信仰と出雲神>

- ・ 大国主への信仰は、大和朝廷が生まれる三世紀半ばより前に、日本全国に広がったと言われる。今なお全国各地に大国主命を祀った神社が多く存在し、その範囲は九州南部から関東、東北地方にまで及んでいる。
- ☑ 伝承者 武光誠氏：「古代出雲王国の謎」
 - ✓ 大国主尊信仰は、急速に全国に伝わっていった。各地の首長が祀る農業神は大国主尊と共通する祖霊信仰をふまえた神であった。そのため、人々は愛される大国主尊の物語が広まると、各地で祀られていた神と大国主命との融合が始まった。
 - ✓ しかし、それは各地の首長が出雲氏の支配下に入ったことを意味していない。
- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 出雲族は、農業、医療、航海術に長けた民族であった。その技術を活かして民衆からの指示を集めてきた。その出雲族の象徴が大国主命である。
 - ✓ 特に大国主信仰は、首長クラスはもとより、民衆のクラスにまで浸透していった。首長クラスの人材は、中央から派遣されることも多く入れ替わりがある。しかし、民衆は地元で根を下ろしているため根強い信仰となる。
 - ✓ そして民衆の心をつかんで出雲氏がほぼ全国を治めるようになった。
- ・ このことは、神話の世界に見る大国主命の人となりからも伺い知ることができる。この大国主信仰が出雲神への信仰とつながっていった。
- ・ その頃各地の首長が出雲族の支配下にあったかどうかは別として、全国に大国主信仰、すなわち出雲神の信仰が広まっていたことは間違いない。

- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 神社のルーツを調べるため奈良に行ったとき驚きの発見をした。
 - ✓ 大和朝廷のお膝元である奈良の古社の多くが出雲系の神を祀っていた。天武天皇を祀る橿原神宮の近くの大きな古社はみんな出雲系の神が祀ってあった。
 - ✓ このことは、大和朝廷をつくるに当たって出雲族が何らかの影響力を持っていたのではないかと語る。
- ・ そして、千数百年経った今でも脈々と信仰が続いているということが、その影響力の強さを物語っているのではないだろうか。

5. 鉄が育んだ伯耆の歴史

<川岸にできた3つの楽楽福神社>

- ・ 出雲、伯耆、因幡には、古くから続く神社がたくさん存在している。
- ・ 皆生温泉で旅館を長年経営していた中島氏によると。
- ☑ 伝承者 中島敏行氏：
 - ✓ 伯耆地方には、古い社がたくさんある。
 - ✓ これらの神社の古い伝承を調べていくと、興味深いことがたくさんあると語る。
- ・ 日野川流域には、鉄にまつわる多くの伝説が残されている。そして伝承にまつわる古社も多く存在している。特に楽楽福（ささふく）と言う名前の神社が多く見られる。
- ☑ 伝承者 坂田知宏氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ この「ささ」は砂鉄を表し、「ふく」は製鉄炉へ風を送る鞆（ふいご）を意味する。たたら製鉄の神様であるという。
- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 楽楽福神社の多くは、川の曲がり角の内側に建てられているという。
 - ✓ なぜなら、川の曲がり角には砂だまりができ、そこには砂鉄が堆積するからである。
 - ✓ つまり、そこは大切な場所であり、神社を建てるのに適した場所であったと語る。